

和弓矢製造

矢師・たいへい小山泰平さん

一本一本の矢に魂を込めて

弓道で使う矢を丹念につくる「矢師」。

創業150年の歴史を誇る小山矢7代目当主の小山泰平さんは、全国でも数少なくなった矢師の一人として活躍している。

射手の体格・力量に合わせて

弓道で使う矢の素材は大きく2つに分けられる。一つは竹、もう一つはアルミやカーボン、グラスファイバーなどのいわゆる新素材だ。現在、全日本弓道連盟に登録している会員は約13万5,000人いるが、その多くが新素材の矢を使っている。アルミにしるカーボンにしる、工業製品なので品質が均一で安定し、価格も安い。アルミ製の矢は竹矢に比べ、5分の1程度の価格で購入できる。そのため高校や中学の弓道部に所属する学生の大半は、アルミなど新素材の矢を使っているという。

かつては竹矢しかない時代が長く

続いた。アルミの矢が登場したのは1960年代以降のことだ。竹矢に比べて価格の安いアルミ矢が登場したことで、弓道人口は急増したといわれる。その弓道人口の急増に竹矢の生産が追いつかず、ますますアルミなど新素材の矢が増えていったのだった。

それでも竹矢にこだわる選手は一定数いて、特に高段者には「竹矢でなければだめだ」という人も多い。竹矢を使うことを出場要件にしている弓道大会もあるそうだ。

「竹矢は丈夫で軽いのが特徴です。さらにオーダーメイド仕様が可能なので、その人の体格や力量に適したものがつくれます」。小山矢の社長、小山泰平さんがいう。

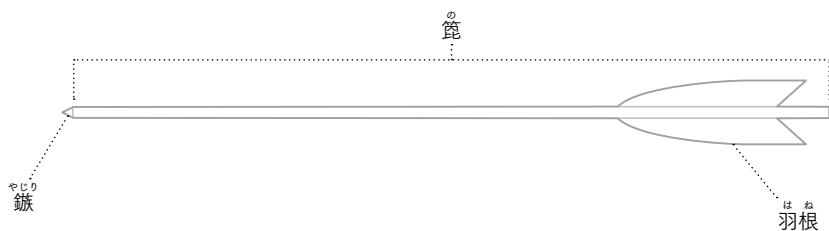
競技としての弓道には、矢の長さや重さについての規定がない。したがって腕の長さや引く力、技量に応じて自分に最も適した矢を選ぶことがとても重要になる。

だが、今、その竹矢をつくることのできる矢師は減少しており、極めて少ないのが実情だ。泰平さんによれば「全国で10人いるかどうか。現役の矢師として実際につくっている人はもっと少ないかもしれない」とのことだ。

しかし、小山矢にはその貴重な矢師が3人もいる。泰平さんと父親の三郎さん、そして伯父の金一さんだ。

道具も自分たちでつくる

小山矢の創業は1870（明治3）年、小山嘉六さんが静岡県の三ケ日で竹矢づくりを始めたことに端を発する。戦時中は一時、矢づくりから離れていたこともあったが、この間150年以上にわたり、矢の専門メーカーとし





「新しい矢を選ぶときは、試し打ちを体験したい」。顧客の要望から店舗の裏に射場を建設。商品を提供するだけでなく、満足度も高めたいという思いがある。有料だが練習場としても提供している。



こやま・たいへい（写真左。右は父・三郎さん）1980年、愛知県岡崎市生まれ。小学生の頃から竹の仕分けなど家業を手伝っていた。大学卒業後は企業に就職して塾の講師を3年間務めた。小山矢に転じたのは25歳のとき。2014年、三郎さんの後を継いで社長に就任した。趣味はパーベキュー。30代のときにクモ膜下出血を発症したが、無事に乗り越え、仕事に邁進している。



写真左、釜で熱した竹を矯め木を使い、手前から先へと竹の曲がりを矯正する。
写真右、鉄粉と松やにと油を混ぜて釣りだねをつくる。釣りだねを細長くするための板も手づくり。

ての歴史を重ねてきた。小山矢のつくる竹矢は、有名な神社の神事などで使われることもある。

工程を細かく分けると70にも及ぶといわれる竹矢の製造は、竹の切り出し作業から始まる。竹矢に使用されるのは矢竹と呼ばれるタケ亜科の植物だ。矢竹は節の部分がそれほど太くなく、肉厚なのが特徴で、これは矢の棒状部分にあたる「筥」に適している。ただし選別が重要で、矢にするのは3年目の矢竹がちょうどいいといわれる。2年目ではまだ若くて柔らかく、4年目では硬すぎるのだという。また夏に刈り取ると水分が多すぎるため、秋頃に刈り取った矢竹が理想だ。

矢の製造には1年はかかる。小山矢では外部の専門業者から矢竹を仕入れ、天日干しする。そうすると緑色が抜けて白くなる。その後、太さや節と節の距離、重さなどでグループ分けを行い、虫がつかないように消毒してから半年間寝かせる。そう

してようやく筥づくりの作業に入る。

筥づくりでまず行うのは荒矯めだ。竹はまっすぐなイメージがあるが、実は意外に曲がっているものが多い。それをまっすぐにする。両端に穴のあいた釜で火を焚き、穴に数回竹を通し、矯め木と呼ばれる道具を使って矯正するのである。

「竹矢づくりに使う道具は汎用性がないために、どこにも売っていません。だから釜や矯め木など、ほとんどの道具は自分たちでつくります。親父たちは以前、竹矢づくりを機械化しようと考え、ベルトコンベアまで自分たちでつくっていました」

鉄粉と松やにて重心を調整

筥がある程度まっすぐになったら今度は小刀で削り、表面の凹凸を整

えていく。削りすぎると筥がへたってしまうし、削り方がよくないとバランスが崩れるので、細心の注意が必要になるという。

削り上げた筥は再び釜に通して再度、入念に矯めていく。まっすぐになったら水と砂をつけて小刀の削り目がなくなるまで磨き、一度洗ってから乾燥させ、さらに火を通して矯めていく。そして木賊を使って艶が出るまで研ぎ、最後に釣り合わせの作業を行う。弓道の競技では弓を引く回数は4回が基本となっている。そのため、矢の販売も4本、または6本を1セットにするのが一般的だ。しかしこのセットの中の一本一本に、重さや重心に違いがあることは望ましくない。それを整えるのがこの作業だ。

「鉄粉と松やにと油を混ぜ、釣りだねをつくります。太めの線香のような形に成形してから適当な長さに切り、竹の中の空洞に入れて熱した箸で押し込みます。そうすると松やに



写真右、矧(は)ぎつけ作業。3枚の羽を筈(の)に3等分に接着する。泰平さんにとってよい矢とはの間に、「お客さんにとってよいものです。当たる矢がよい矢ですね」。

が溶け、竹の中にしっかりとくっつく。その重さで、筈の重心バランスをとるのです」

この作業を終えたら、最後は筈の端に羽根と鏃^{やじり}を付けてできあがりだ。

小売り業に参入、射場も開設

小山矢は伝統的な竹矢づくりを守りながら、一方で、三郎さんの時代から新しいことに挑戦してきた。

仕上げの羽根は、本来鷹や鷺が主流だったが、現在は七面鳥やガチョウの羽が多く使われている。しかし、そうした鳥の羽根模様は美しくないという声があったため、三郎さんは愛知県産業技術研究所に依頼し、羽根の新しい漂白技術を開発した。さらに顧客の要望に応えるため、羽根のデザインにもこだわった。愛知産業大学と提携して産学共同で羽根のデザインを考えたのだ。

泰平さんが社長になってからは、それまで取り組んでいなかった正社

員の採用も積極的に行った。企業の基盤を整えなければ、持続的な成長はできないと考えたからだ。

2020年には新たに小売り業にも参入。店舗を開設するとともに射場を併設した。それまでのように製造卸だけでは限界があると考えて、高校などに直接販売できる仕組みをつくるのが狙いだ。

「お客さんも新しい矢を買うときには、試し打ちをしたいはず。特にアルミの矢とカーボンの矢のどちらがいいか迷ったときなど、試し打ちで違いを体感してみたいという方がたくさんいらっしゃいました。顧客満足度を高めたいという思いもあり、射場の建設に踏み切りました」

この射場は試し打ちだけではなく、練習場としても使用できる(有料)。今は新型コロナウイルスの影響で、

中学・高校では部活動が制限されている。そうした学校の弓道部員が練習の機会を求めてよくこの射場を利用しに来るという。

そんな泰平さんにとって目下の課題は、竹矢づくりのできる後継者がいないことだ。実は同社でつくる矢はアルミ製が7割、カーボン製が2割ほどで、竹矢はほんの少ししかない。主力顧客の中高生は大半が廉価な矢を使っているからだ。

「製造に時間とコストのかかる竹矢は、ほとんど利益が出ません。だから竹矢の製造は父と伯父に任せ、社員にはさせていないのです。とはいえ、神事などには竹矢しか使えませんし、文化として竹矢も残さなくてはいけないと思います。竹矢づくりの後継者をどうするか、きちんと考えていかなければなりません」

小山矢7代目当主として、そして数少ない矢師の一人としても、泰平さんは真剣にこの課題と向き合っている。